

まずはご挨拶

守安 収

4月1日付けで、館長に就任しました。▼私は、もともと当館建設のために結成された6人のプロジェクトチームの一員で、皆よりかなり年下でした。その立場を斟酌せず、思ったことを訴え、設計者の故岡田新一先生にも食い下がる厄介な学芸員でしたから、周囲は面倒だったかもしれません。でも、生意気な若僧を叱らずに育ててくれました。数年間に及ぶ検討会や収集作業があり、さらに本格化した開設準備事務局時代を経て、1988年3月18日、開館に至りました。したがって30年以上、当館に係ってきたこととなります。▼しかし先年、岡山県を退職して地元の吉備国際大学に勤務し、館から少し距離をおいたことで、改めて当館の設立目的や機能、社会的な存在意義、役割といった点を考え直すことができたように思えます。▼端的に言えば、「岡山の美術」をセールスポイントにする公立館として、収集・保存・公開・調査研究を通じて蓄積してきた作品や資料、人的ネットワーク等々、それらはまさに地域情報なのですが、その意味や価値を丁寧に発信していくことが肝要であり、と同時に館に向けられた多様なニーズを把握して活動する、それこそが原点であると再認識した次第です。そうした双方向性を大切にしなければと考えます。情報を評価するのは利用者です。館の独りよがりな戒め、また入館者だけが利用者ではないことも意識し、たくさんの潜在的な利用者の方々にも納得していただけるサービスを提供できる美術館を構築していくつもりです。そのためには多方面との多角的な連携が不可欠です。よろしくお願いたします。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/

交通案内 JR岡山駅東口から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩3分
・宇野バス 四御神行または瀬戸駅行「表町入り口」下車徒歩3分
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00 (入館は16:30まで)
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

編集後記

大山真季

美術館ニュース109号をお届けします。涼しげな格好をした人が街にあふれ、夏休みが段々と近づいて来るのを感じる今日この頃。当館では夏休み期間中、本誌でもご紹介している「微笑みに込められた祈り 円空・木喰展」を開催します。日本中を旅しながら多くの仏像を残したこの両者。思わず観ているこちらにも笑顔になってしまうような柔和な微笑みの表情と、木の形や素材感を最大限にいかした造形が魅力の神仏像です。円空と木喰が全国を廻ったように、この夏休みの期間を利用して旅に出かけてみてはいかがでしょうか。

「美術館の紹介」vol.9

岡山県立美術館を想起させる三角形をあしらったホールのカーテンは、舞台と観客を区切るためのプロセニアムの役割を果たしている。白地の布の重なりでつくられた額縁は、見た者へ美しさ以上に強烈な印象を残すだろう。



反響する景色

大山真季(学芸員)

静寂が漂う展示室。入り口から向かって左手には、かつて舞踏集団・山海塾の舞台『三人姉妹』で使われた、中西夏之による4枚の紗幕作品が天井から吊り下がり、幕越しには伊勢崎淳による備前焼のオブジェ作品《トーテム・ポール》と《侍》が佇む。天に視線を移すと、岡崎和郎の《補遺の庭》シリーズの最新作として、根元部分が透明の球体で覆われた木の枝が横一文字に宙からぶら下がり、ゆっくりと回転している。足下には鳥と虫の象形文字のオブジェ、そしてこの天と地を繋ぐかのように、球体から高く真っ直ぐ鉄棒が伸びている。画家・中西夏之が用意した舞台を、オブジェの岡崎和郎と備前焼の伊勢崎淳が周囲を彩る。そのようにして「^{ういしぜん}有為自然—岡崎和郎、伊勢崎淳、中西夏之展」(会期:2015.4.28-6.7)における“メイン舞台”が構築された。

対面にはメイン舞台を眺望するための装置として、大きな《ニツの環》が重なりながら立ち現れている。この環もまた紗幕と同じく山海塾の舞台『縄文頌』で使われた中西の作品であり、作家の絵画における制作過程を追体験するための媒体的役割も担っている。

「自然と人間の営みを、芸術を視座に振り返る」をテーマに掲げた本展では、「自然」と「人間」という二つのキーワードを元に様々な表現者や有識者などを招聘し、イベントを開催した。彼／彼女らのパフォーマンスにより、今回のメイン舞台である展示室という本来「静的」である空間が「動的」な空間へと変貌を遂げた瞬間について幾らばかりか記録を留めておきたい。

身近な素材を用いて「創作音具」と呼ばれる独自の楽器を製作し、「場」と「音」の関係について探究しているサウンドアーティスト・鈴木昭男と、周囲の環境による影響で動きを生み出すダンサー・宮北裕美によるパフォーマンス「なげかけとたどり2015」が、本展最初の公演として5月5日に開催された。

今回のために作られたという、カートに乗せられた箱状の移動型音具とともに登場した二人は、メイン舞台とは対照的に、各作家の作品がケースや壁面に整然と並ぶ展示室奥の空間へと移動しパフォーマンスをスタートさせた。鈴木は一歩ずつ静かに歩みを進めながら、靴下に入れられたウイスキーボトルを両手に持ち、その場の音を確認めるようにゆっくりと御影石の床に落としていく。ボトルが床に当たったその瞬間、そこに存在する全てのモノを一つに包み込むかのように、柔らかな澄んだ音が空間全体へと響き渡った。

一方、ケースを隔て鈴木の隣に並んだ宮北は、本展出品作である岡崎和郎《ウイリアムテルの記念碑》へのオマージュとして、頭上にリングを乗せ、真っ直ぐ、そして静かに空間の奥まで前進していく。果物を頭に載せて動くというシンプルな試みは宮北がワークショップ等で近年試みている行為でもある。同じ位置から歩みを始めた両者だが、それぞれの歩調により少しずつその間隔が離れていく。スタート位置を決めた以外は全くの即興という二人のパフォーマンスは、各々が自由に動きながら時に互いをとらえ、重なったかと思えば再びそれぞれの方向へ進んでいく。観客は演者の一挙手一投足を目と耳で捉えつつ、次に起こる出来事に期待を膨らませながら間合いをとり見守る。

メイン舞台の空間へと戻ってきた二人は、より密に作品との距離を縮めていった。宮北は壁面に展示された岡崎和郎の代表的作品《HISASHI》の下に収まり、天を左右に見渡ししながら掌を上へ向けたかと

鈴木昭男+宮北裕美「なげかけとたどり2015」公演風景(2015.5.5)



柴田聡子「LIVE+トークなど」より、紗幕の中央で最後の曲を披露する柴田と観客を、《ニツの環》越しに眺める(2015.5.23)

思えば《HISASHI》から離れていく。それは雨宿りをしていた人が、雨が上がったかどうかを確認し再び歩み始める時の様子であり、日常の中での庇の存在と人間の関わりを体現していた。大きな環の転がりを身体全体で表現したり、環を通じてメイン舞台を眺めたり、はたまた反対側の紗幕に開けられた小さな孔越しに会場を覗いたり、演者から観客へ向けたアプローチとも取れる表現も展開された。宮北が床に寝転がり動きが止まった際には、鈴木が宮北を目覚めさせるかのように、バチで木箱を叩いたり、箱の縁を薄い板で弾くなど、一つの音具から奏でられる多彩な音は次第に激しさを増していく。それに呼応するように再び動き始めた宮北は、鈴木がなげかける音と周囲を取り巻く作品、そして観客に導かれるように次々と身体表現を繰り返していった。

演者と作品、そして観客という三者の関わりが音とダンスによって見事に一つとなり、作品もまるで意思あるものであるかのようにその存在感が顕わになった瞬間であった。

会期も後半に入った5月23日にはシンガーソングライターの柴田聡子を迎え、学芸員による作品解説を挟みつつ、ギター弾き語りLIVEを開催した。中西のインスタレーション作品《着陸と着水XIV 五浦海岸》を中心に三名の作家が列島をなすように作品を展示している屋内広場から、突如として「いきすぎた友達」(2ndアルバム「いじわる全集」収録曲)の弾き語りが始まった。会場内に置かれた監視員用の椅子に座りながら、シンプルなギターの音色と、人間味の強いストレートな歌詞を唄い上げる優しく素直な声が、天高く空間の隅々まで広がる。吹き抜けの高い天井から吊り下がる《着陸と着水XIV 五浦海岸》の真鍮板は、ゆっくりと回転し続けながら歌い手と観客、周辺の景色を映し出していた。

柴田が歌い終わると学芸員が作品解説をし、柴田も観客とともにその話に耳を傾ける。そして解説が終わるとまた自由にセレクトした曲を歌い始める。双方が混ざり合うこともなく、場所を転々と変えながら歌と話は流れのままに進んでいく。途中、本展の英語タイトルの由来となっている夏目漱石の著書『草枕』の朗読を柴田が行うなど、歌声とはまた違う芯のしっかりした声でその世界観を伝えてくれた。その場の状況に応じて繰り返される出来事を眺めながら、観客も自由に作品を鑑賞したり唄を聴く。終始緩やかな時間が流れていた。最後はメイン舞台である紗幕の間に立ち、「カープファンの子」(1stアルバム「しばたさところ島」収録曲)を熱唱する姿は、紗幕を介することで姿が朧気になりながらも、会場の外まで広がる歌声で確かな存在感をそこに示していた。

表現者と作品、観客もまた取り巻く環境によって変化する。「自然」に変わりゆく景色が広がったひと時だった。

岡山で造仏したもう一人の木食行者—善住さん

中田利枝子(学芸課長)

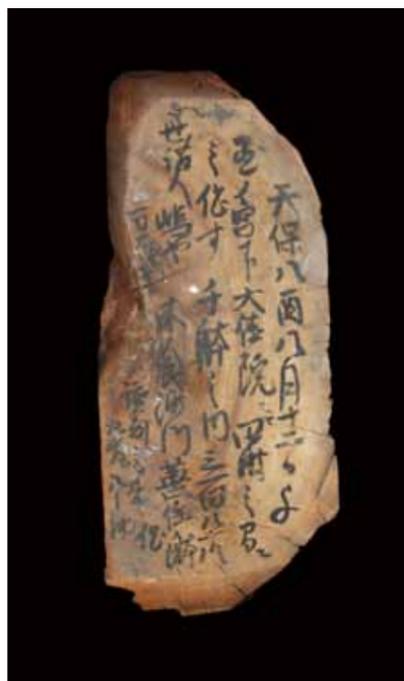
7月17日から8月23日、当館では特別展「円空・木喰展」を開催します。豪快・簡潔な円空(1632-95)の作品、温厚・柔和な木喰(1718-1810)の作品。それぞれがオリジナリティに溢れていますが、どちらもまるで樹木の精が神仏の姿をかりて降り立ったようであり、斬新な現代作品のようでもあります。

そもそも「木食」とは、穀物や豆類を断って草や木の実だけを食する修行をさします。このような修行をして人々から尊敬された僧は「木食上人」と言われ、中世以来、多く現れました。今回の展覧会でとりあげる木食は、特に「木喰」と表記します。本人が彫像や書画類に「木喰行道」、「木喰五行菩薩」、「木喰明満仙人」などと記していたことによります。

木喰の旅は北海道から九州にまでおよび、そのうち天明7(1787)年、寛政10(1798)年の2度、岡山県を通過しています。木喰の宿泊記録(今回出品)によると、2日間滞在した場所もあり、そういった時にはおそらく造像したであろうと推測されますが、残念ながら岡山県下では未だ彼の作品は見つかっていません。

ところで、各地を巡った多くの木食上人たちのうち、江戸時代終わり頃に岡山に来て作品を残している人がいます。名を善住といい、明治3(1870)年に香川県まんのう町で土中入定(自ら土中に入り、やがてそこで臨終を迎える)しました。岡山市大福寺にある善住の作品は上半身が大きく前傾し、樹幹の湾曲がそのままに生かされています。「薬玉師菩薩」(通称「かさもりさま」と呼ばれるその姿は、手に薬壺と剣を持ち、頭上に3つの顔が表されたものです。推測するに薬師如来、不動明王、三面大黒天の合体でしょうか。病氣平癒、厄災消除、家運繁栄と、御利益てんこ盛りの朗らかさです。像底の墨書によると、天保8(1837)年、玉井宮(岡山市中区)の別当寺である大徳院(明治時代に大福寺に合併)で、四時(約8時間)をかけて制作したとわかります。また千体を彫るという誓いを立てて、この像は388体目にあたることも読み取れます。昨年、瀬戸内歴史民俗資料館で香川県内の善住作品が紹介されましたが、まだ確認数は僅かです。

人々の幸せを願って彫られた木食上人たちの作品は、寸法や姿のルールに捕らわれない独自の造形ゆえに、長く顧みられませんでした。今日、芸術作品として高く評価されている木喰仏でさえ、その再発見はわずか90余年前です。未だ名の知られない多くの木食上人の作品があり、私たちがそこに新しい美を見いだすのを待っているかもしれません。



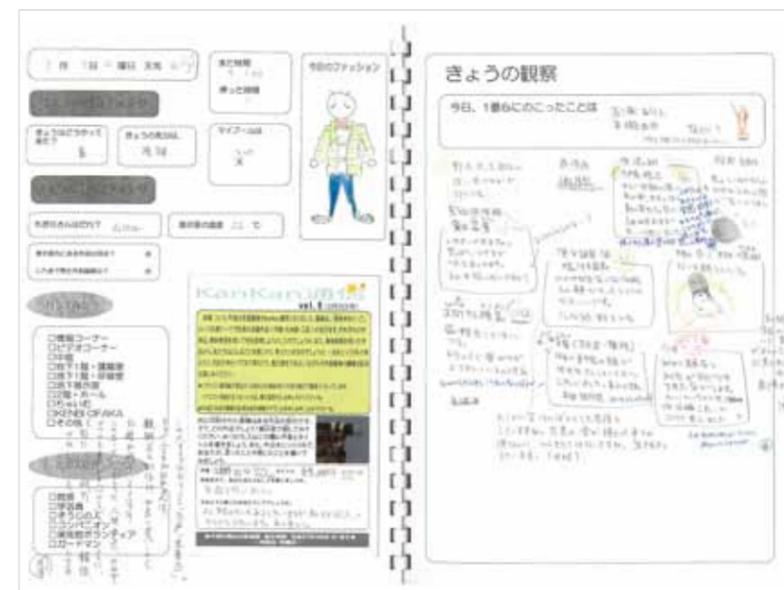
図版:善住作《薬玉師菩薩(かさもりさま)》(上)と像底墨書(下) 岡山市中区 大福寺

観察日記

岡本裕子(主任学芸員)



3. 「観察日記」の表紙にお互いを描いた親子の似顔絵



1. 「観察日記」見開きページ

当館には、「観察日記」という息の長いプログラムがあります。一言でいうなら「参加者と学芸員の交換日記」です。展示替えごとに「Kankan通信」(はがき)が参加者の手元に届き、展示期間中なら来館しやすい時にいつでも参加できるという一年間(展示替えごと9回)継続参加のプログラムです。見開き一ページ[図1]が、一回分のスペースで、作品をみながら自分が思ったこと、感じたこと、また疑問に思ったことなどを記述し、その記述に対して学芸員がコメントをします。そして、一年間参加した後、参加者が選ぶこの一点展(リクエスト展)を開催するというものです。

この春、小学校から高校3年生まで参加したYさんが観察日記を卒業し、美術系の大学へ進みました。彼女が書き(描き)綴った観察日記は、なんと10冊[図2]!始まりは小学校低学年で、一ページ一ページ、一冊一冊に、彼女の時間の記録が綴られています。また、始めて数年は、それぞれの観察日記の表紙に、親子でお互いに似顔絵[図3]を描いています。参加者の手によって、このプログラムにプラスアルファの楽しみが生まれていたようです。

お母さん曰く、「娘が小学生にあがった頃から、子どもが被害に遭う様々な事件が世の中で起こり、外で自由に遊ばせることが難しくなってきました。そんな時、この観察日記のことを知り参加し始めました。子どもが小さい頃は、展示作品に触るのではないかと、他のお客様に迷惑をかけるのではないかなど、ハラハラどきどきすることが多く、自分がゆっくり作品をみる時間はなかったように思います。時間がたつにつれて、娘も展示室になれ、また、監視員さんに

も顔を覚えてもらい、気軽に声をかけていただけるので、思い思いに自分の時間を過ごしたり、作品をみた感想をお互いに話し合うことができるようになりました。美術館が、「親子にとって安心できる場」となりました。』

そして、この4月から『《カーテンを引く子供》をみて、国吉康雄展に来たことがあることを思い出した』と語る大学生Oさんが、新しく観察日記をはじめました。彼女が小学生の頃開催された国吉展で《カーテンを引く子供》に出会ったのでしょうか。時間の経過の中に埋もれていた記憶が、観察日記に参加することを通して再び蘇ってきたようです。

シンプルで、超アナログなこのプログラムが、美術館や美術と“出会う”、また“再会する”きっかけの一つになれるよう、これからも大切に育んでいきたい——息の長いプログラムだからこそその価値を改めて感じました。



2. 参加者が10年間かけて記録した「観察日記」

新収蔵品紹介

File 05

原撫松 購入と寄贈により、
所蔵品が充実しました。
廣瀬就久(学芸員)



1.《自画像》明治38(1905)年

岡山市に生まれた原撫松(1866-1912)は、岡山と京都で油彩画を学び、京都府画学校を優等第一位で卒業します。そして岡山のちに東京で、肖像画家として活動しました。その後、画技の上達を目指して、1904年から07年まで英国に留学します。西洋美術を実地に研究して、底光りのするような、豊かで落ち着いたある絵肌が生まれました。当時の日本人として、最も優れた油彩画家の一人と言えます。帰国後は体調を崩して、大正期を迎えずに死去しました。留学後の作品は多くありません。画壇との接触がなかったこと、各家庭に納められる肖像画が主体であったことから、原の作品を対外的に目にすることは少なく、長い間忘れられていました。没後80年以上を経て、当館ほか二館で開催された「原撫松展」(1997年)では、多くの作品が展示されました。この展覧会のあと、原の名前も少し

ずつ知られてきました。

当館では留学期の《老人像》(1906)などを所蔵していますが、去年は同じく留学期の《自画像》[図1]など、7点の油彩画を購入しました。また油彩、水彩、素描作品について寄贈を受けました。油彩画の寄贈作品には、《鶴と亀のいる海岸風景》[図2]のように、岡山での初期の画境を見ることができます。《牡丹》[図3]のような水彩画や素描を交えて、画家の初期から晩期まで、画業の全体をたどることができるでしょう。植物の的確な写生、旅行の時に関心をもった風景、そして留学とともに熟練する人物画の描写などを、見ることができます。

これらの購入、寄贈作品から数点の作品を、2016年2月10日から3月21日に開催する「新収蔵品展」で紹介いたします。ご期待ください。



3.《牡丹》明治27(1894)年



2.《鶴と亀のいる海岸風景》明治23(1890)年

展覧会スケジュール

7月
July

8月
August

9月
September

微笑みに込められた祈り
円空・木喰展
ギャラリートーク
7月18日|土|、8月15日|土|
各回14:00~
講師 当館学芸員
会場 地下展示室 ※要観覧券

7月26日|日| 13:30~15:00

記念講演会

「微笑みに込められた祈り 円空・木喰仏」

講師 小島梯次

(本展監修者・円空学会理事長・全国木喰研究会評議員)

会場 2階ホール(先着210名)

7月17日|金|—8月23日|日|

【特別展】

微笑みに込められた祈り 円空・木喰展

江戸時代に日本各地を巡り、多くの仏像や神像を彫った円空(1632-1695)と木喰(1718-1810)。円空は鑿や鉋の跡が荒々しく残る力強い像を彫り、木喰は柔らかく丸みを帯びた像を残しました。それぞれの作風は異なりますが、その多くは慈愛あふれる微笑みをたたえています。本展では、新発見・初公開を含む全国から集められた円空と木喰の木彫像あわせて約270点を展覧し、それぞれの魅力に迫ります。

8月1日|土| 14:00~15:30

美術館講座

「円空と木喰仏の現代」

講師 鍵岡正謹(当館顧問)

会場 地下講義室(先着70名)

8月8日|土| 14:00~15:30

美術館講座

「廻国聖の造形」

講師 中田利枝子(学芸課長)

会場 地下講義室(先着70名)

9月2日|水|—9月13日|日|

第66回岡山県美術展覧会

9月16日|金|—11月3日|火・祝|

【岡山的美術展】

河原修平展

河原修平(1915-1974)は倉敷市生まれ、上京して東光会展、新文展に入選しました。44年に疎開のため倉敷に戻り、終生同地で過ごします。戦後は倉敷素描絵画研究所を開設し、燈灰会を主宰するなど、後進を導きました。本年が生誕100年になることを契機に、関係者のご協力を得て、河原の画業を回顧します。